

Emergency



Watch



神戸こども初期急病センター

2017年1月受診者数

3149人

【疾患頻度】

1. インフルエンザ
(確定：A型833人、B型4人)：1021人
2. 急性上気道炎・感冒：663人
3. 感染性胃腸炎：351人
4. 咽頭炎：174人
5. 気管支炎：129人

全国的にインフルエンザが大流行しており、神戸こども初期急病センターにも多くのインフルエンザ患者さんが受診されました。まだまだ寒い季節が続きますが、2月下旬からは早くも花粉症の流行が始まります。日本気象協会によると、近畿地方では今年は去年の2倍以上の花粉尘散が予測されています。そこで今月は花粉症に代表されるアレルギー性鼻炎で使用される薬について取り上げました。



Q1：アレルギー性鼻炎のメカニズムは？

アレルギーは、異物に対する防御システムが過剰に働いてしまう状態です。アレルギー性鼻炎では、ハウスダスト、花粉類、カビ類、動物の毛・フケなどの原因（アレルゲン）に対して過敏症状を起こしてしまいます。「アレルゲン」が体内に入り、リンパ球によって作られた「抗体」と反応することで、炎症を引き起こす化学伝達物質（ヒスタミン、ロイコトリエンなど）が放出されます。ヒスタミンは主にくしゃみや鼻水の原因となり、ロイコトリエンは鼻粘膜の血管を刺激して鼻づまりを引き起こします。

Q2：アレルギー性鼻炎の薬はどんな種類がありますか？

内服薬、点鼻薬、点眼薬という形状の違いもありますし、抗ヒスタミン薬、抗ロイコトリエン薬、炎症全体を抑えるステロイド薬など、たくさんの種類があります。即効性があるのは抗ヒスタミン薬ですが、眠気などの副作用も急に出現します。抗ロイコトリエン薬は鼻づまりに効きますが効果が出るまで少し時間がかかります。ステロイド薬は症状全般に効果が期待できますが、内服では副作用が強い場合があります。点鼻薬として使う場合が多いです。

Q3：薬の副作用はどんなものがありますか？

内服の抗ヒスタミン薬では脳への作用により眠気が出ることが多く、はっきりとした眠気を自覚していなくても集中力や判断力が低下する可能性があります。けいれんを誘発することも知られていますので、てんかんや熱性けいれんなどの持病がある場合は要注意です。古くからある第1世代の抗ヒスタミン薬では特に注意が必要ですが、第2世代の抗ヒスタミン薬では脳への作用による眠気やけいれん誘発を生じにくくなりました。内服のステロイド薬を長期に使用すると肥満、免疫低下、身体発育の妨げなどをきたしますが、点鼻薬で医師の指示通りの使用方法であれば心配ありません。

アレルギー性鼻炎の薬は種類が多く、病院での処方薬以外に市販薬もあります。また、アレルギー性鼻炎の症状は軽症から重症まで個人差が大きいので、自己判断をせずに医師・薬剤師に相談して治療することが重要です。